

よろずは

平成二八年
十一月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。

万葉歌と季節の植物5

人^{ひと}皆^{みな}は萩^{はぎ}を秋と云ふ^よ縦^よしわれは尾花^{おぼな}が末^{うれ}を秋とは言はむ

(巻十・二二一〇／作者未詳)

人は皆、萩のよさを秋だという。たとえそうでも、私は尾花の穂先のよさをこそ、秋といおう。

みなさんは秋の植物といえば、何を思い浮かべるでしょうか。美しく色付くモミジはもちろん、秋の七草を思い出す方もいらっしゃるでしょうか。『万葉集』の植物では、四季をとおして「萩」がもっとも多く、歌に詠まれており、万葉びとたちは秋の季節を特に好んでいたようです。

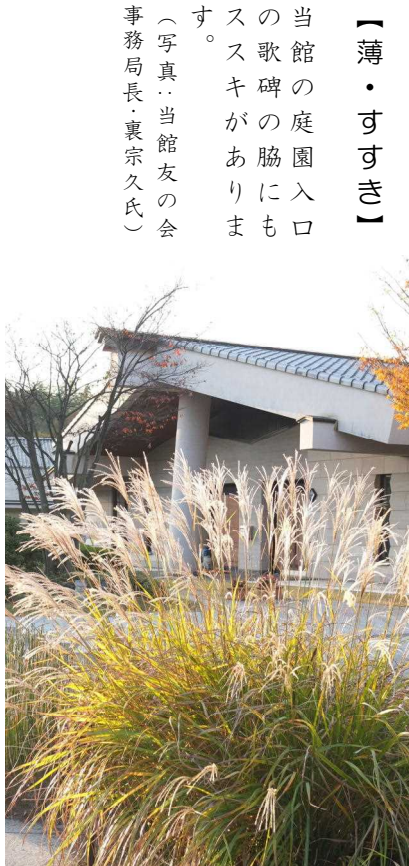
万葉びとたちに大人気の「萩」ですが、今回の歌の作者はその「萩」よりも、秋はやはり「尾花」に限るのだ、と宣言しています。「尾花」はスキの穂の部分を指しますが、転じてスキそのものを指す場合もあり、『万葉集』では「はた(はだ)すすき」や「はなすすき」なども詠まれています。「末」とは先端や枝先のことを指す言葉ですので、「尾花」の穂先の部分、ふわふわとした花穂のことを指します。

みんなとは違った趣味を歌で披露する、少し斜に構えたこの作者のように、万葉びともさまざまな好みや季節の楽しみ方があったことが想像されます。

【薄・すすき】

当館の庭園入口の歌碑の脇にもスキがあります。

(写真…当館友の会事務局長・裏宗久氏)



【万葉古代学係】